

秋の深まりとともに、街路樹が彩づき始めるはずのこの時期、今年は強風と塩害で、大部分が枯れて葉を落としてしまいました。

日没が早まって『燈火親しむ候』になりましたね。  
最近、読書の方法も進化しつつあるとのこと。  
「静かにページをめくる紙ずれの音」を懐かしむような、  
そんな時代が来ることになるのでしょうか。



先日、図書館の文庫棚に、懐かしいタイトルを見つけ、手に取りました。  
昔、女子高生の頃だったでしょうか。何か、いけない物に手を伸ばして  
しまったかのように、うつむき加減で受付を済ませたのを覚えています。  
その本の題名は「チャタレー夫人の恋人」。

今回、数十年の年月を経て読み返し、あの時の新鮮なドキドキ感は蘇る  
ことは無かったものの、和訳表現に苦労したんだろうなあ、というお節介  
の気持ちと、登場人物の人間模様の面白さに興味をそそられました。  
そして、最終章では、あの頃決して好きになれなかったメラーズの  
純粋な心情が理解でき、感銘を新たにすることが出来ました。



幼い日 心にうけた その感動が  
その人の成長につれて  
ふくよかに より美しく成長し、  
心の糧になっている。

—いわさき ちひろ—



今年は、暮らしを慈しみ、いのちを描いた画家、『いわさきちひろ』の  
生誕100年だそうです。絵本の中で出逢う動物も花も、生き生きと命を輝  
かせ、今なお多くの子どもの心に影響を与え続けているんですね。